彼女は一人で歩くのか？

Does She Walk Alone?

森博嗣

MORI Hiroshi

ウォーカロン（walk-alone）。「単独歩行者」と呼ばれる人工細胞で作られた生命体。人間との差はほとんどなく、容易に違いは識別できない。研究者のハギリは、何者かに命を狙われた。心当たりはなかった。彼を保護しに来たウグイによると、ウォーカロンと人間を識別するためのハギリの研究成果が襲撃理由ではないかとのことだが。人間性とは命とは何か問いかける、知性が予見する未来の物語。

プロローグ

研究室の棺桶の中で目が覚めた。時刻は七時だった。

自宅へ帰るのが面倒になって、一週間ほどまえに注文して届けてもらった棺桶で、一晩の睡眠に使ったのは初めてだった。健康管理はするが、健康に影響を与えないスタンダードタイプだから値段も安かった。自宅の棺桶と同じメーカのものだが、やはり新しいものは、どことなくスマートだ。起き上がって外に出ると、自動的に上蓋が閉まった。その状態でテーブルの代わりにもなる。だから、ソファの前に置いてある。

僕が起きたことで、モニタが明るくなった。目を覚ました直後の僕の目は不良で、しばらくはピントが合わないのだ。まずは、コーヒーでも飲もうと思ったが、湯だけ沸かして、さきにトイレに行くことにした。

トイレは何事もなくいつものトイレだったけれど、研究室に戻ってきたら異変があった。ソファに知らない女が座っていたのだ。もちろん、女性かどうか確認をしたわけではない。ただ、ファッション的に女性っぽいという意味にすぎない。

僕が部屋に入ってきたことに驚く様子もなく、すっと滑らかな動作で立ち上がった。上下とも黒い服装で髪も黒い。人形みたいな顔で、こちらを見た。もっとも、最近の女性はほとんど人形みたいだから、珍しいことではない。

「ハギリ先生ですね?」そう言った。日本語だ。

「えっと、何の用事ですか?」いきなりの質問は、少し失礼だと感じたので、不機嫌な顔をしたつもりだが、もともと朝は不機嫌なので、なんの努力もいらない。

「私の用事は、貴方がハギリ・ソーイであることを確認しないと申し上げられません」

「なるほど。私も、貴女の有用性が確認できないかぎり、質問に答えようとは思いませんけれど」

「私は、ウグイと申します」彼女は、片手をこちらへ差し出した。

トイレに行くまえにメガネをかけていたので、彼女のライセンスを見ることができた。細かいデータはピントが合わず読めなかったが、国家公務員だということはわかった。警察と科学研究所の両方のアイコンもあった。それ以外のアイコンは知らないものだ。日本のものではないかもしれない。

「こんな朝早くから何の用ですか?」

「先生、私の質問にお答えになっていません」

「私は、ハギリですけど」

「わかりました」ウグイは頷いた。「先生に危険が及ぶ可能性があるため、私が周辺の調査に参りました。調査期間は、とりあえず七十二時間です。その間に、対象を発見し排除するのが私の仕事です」
「危険が及ぶ？　どんな種類の危険ですか？」
「危険には、種類はありません」
「そうか、では、えっと……、誰が私に危険をもたらすのですか？」
「それは、私の管轄外です」
「わかりました。まあ、仕事の邪魔をしない範囲でお願いします。この部屋の捜索でも始めますか？　爆弾でも出てくると考えているのですか？」
「先生は、コーヒーを飲まれるところだったのでは？　私にかまわず、どうぞ。その旧式のポットの湯は現在九十二度です」
　レンジのポットを慌てて取りにいった。コーヒーメーカにカップを置いたところで、彼女に尋ねた。
「君は、コーヒーを飲みますか？」
「いいえ」こちらを見ないでウグイは答えた。
　彼女は何をしているのか、というと、部屋の中央に立って、こちらに背を向けていた。壁の棚を見ているようだ。ファイルが並んでいて、その手前に細々としたものが置かれている。ほとんどはなにかの記念というのか、単なる置物だった。自分としては、そういった類のものにさほど執着はないのだが、なにかの弾みで自分の元へやってきた場合、すぐに捨てられない気弱さがあって、その小さな躊躇が蓄積した結果だ。
　一人でコーヒーを飲んで、モニタに向かった。数々の連絡に目を通し、昨夜の解析結果をもう一度見た。実験については、午前中にやることはない。助手のアカマが打合わせにくる約束だが、それにはまだ少々時間があった。
　ウグイには背を向けていた。彼女が何をしているのか、興味はなかったからだ。しかし、部屋はそれほど広いわけではない。五メートルほどのところに、彼女はいる。物音を立てないので、歩いている様子もない。緊急の用件がないことが確認できたところで、カップに片手を伸ばし、椅子を四十五度ほど回転させて、後ろを振り返った。
　ウグイはこちらを見ていた。背筋を伸ばして立っている。表情はない。視線は真っ直ぐで、また瞬きもしない。彼女の顔の造形はインド系かな、と思った。ただ、色は白い。こういったことは、人工的にどうにでもなることなので、大した意味はないが。
「何をしているんです？　なにか危険が見つかりましたか？」と尋ねてみた。
「ここではない」無表情のまま、ウグイが答えた。
　しばらく待ったが、そのあとの言葉はない。ここではないならどこなのかを説明するのが普通の感覚だと思うのだが。

「じゃあ、どこですか？」
「先生、今日のご予定は？」
「え？　予定って、特にありませんけれど。実験は午後からです」

続きは本編で！